

健康・医療・介護・福祉ニュース

◆ 最新の健康・医療・介護・福祉などに関するニュースを集めて紹介します。

地域医療の架け橋に

4

■ 奈良医療センター

読者の皆さんはこの欄で、当院の神経内科、松村診療部長の神経難病、特にパーキンソン病のお話を覚えておられますか？

2000年代に入って、新たな薬が開発され、治療がさらに進んでいることを紹介しました。その記事を読まれて、心強く感じられたのではないのでしょうか。

実はパーキンソン病は、お薬だけでなく手術によって病気を良くすることもできるのです。今回は、パーキンソン病の「手術治療」について紹介します。

実は手術の歴史は古く、パーキンソン病の振戦(ふるえ)に対しては、1950年代から行われていました。しかしその後、良いお薬が開発され、手術は不要とまで考えられました。

パーキンソン病の症状を良くする「手術」

国立病院機構奈良医療センター 平林 秀裕
特命副院長 (脳神経外科)



平林 秀裕
特命副院長
(脳神経外科)

【略歴】昭和33年、埼玉県生まれ、58歳。奈良県立医科大学卒業。スウェーデン(ウメオ大学)脳神経外科で定位・機能神経外科学を学び、医学博士号授与。県立医科大学准教授を経て、平成22年から現職

ところが、薬を長く飲んで、副作用が現れることが知られるようになりまし。すなわち、「オン・オフ現象」(薬が効いているときと効いていない時が交互に現れる)が、薬を長く飲んで、よって可能になった方法です。この治療で、患者さんの日常生活の質をよくすることができ、その効果は数年にわたります。有効性は、世界

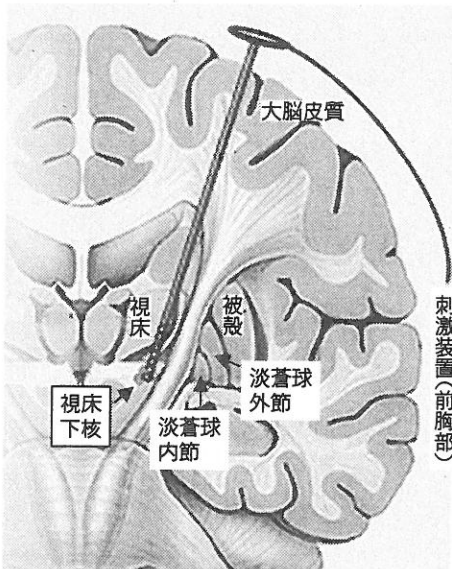
電気流して症状改善

れて、日常生活がしづらくなる(や、ジスキネシア(自分の気持ちに反して体が勝手に動いてしまう) などと呼ばれる症状です。

中で検証されており、当院は我が国でも有数のパーキンソン(基底核)の神経回路の働き

ン病に対する手術療法実績を持つ病院です。ところで、なぜ脳深部刺激療法は、パーキンソン病に効くのでしょうか？パーキンソン病は、脳の深部にあるドパミン細胞が40〜60%に減ってしまうと症状が現れます。神経細胞に含まれるドパミンという神経伝達物質(神経の興奮を伝える物質、神経の働きを強めたり弱めたりすることができる)が減ると、異常になり、さまざまな症状が出てきます。パーキンソン病は、脳の深部にあるドパミン細胞が40〜60%に減ってしまうと症状が現れます。神経細胞に含まれるドパミンという神経伝達物質(神経の興奮を伝える物質、神経の働きを強めたり弱めたりすることができる)が減ると、異常になり、さまざまな症状が出てきます。

脳深部刺激療法



このようにお薬だけで治療が難しいパーキンソン病の患者さんに、「脳深部刺激療法」(図)という手術療法が開発されました。これは、脳内に直径約1mmの細い刺激電極を留置して、脳の一部に電気を流して、脳の働きを正常化する方法で、医療技術の進歩に

当院では、脳神経外科、神経内科のみならず各職種のスタッフが、進行するパーキンソン病に対してチーム医療で取り組んでいます。お困りのことがありましたら、お気軽に当院地域連携室までご相談ください。次回(7月13日)掲載予定

独立行政法人
国立病院機構奈良医療センター
星田 徹院長
電話0742 (45) 4591